

# 『平家』と聖たち

——高野山系の説話を中心に——

渡辺貞磨

今、その例を、滝口入道・横笛の説話を見よう。

自分は、近時『平家』における建礼門院や觸體尼の話が、大原→東山、あるいは、東山→四天王寺といったかたちで、特定の地域の間を移動し、展開して行く性質をもつてているということを指摘し、そして、そのような移動・展開の原動力として、それらの地域を往来しつつ集団的な念佛の勧進に活躍した『融通念佛すすむる聖<sup>①</sup>』の存在が考えられねばならない、ということを論じた。  
ところで、このような、移動し展開して行く性質は、『平家』の他の仏教説話にも見うけられるようである。

滝口に對面をこぼまれた後の横笛についての話である。  
②その後、横笛も亦、出家する。しかし、滝口との愛をみ

一問題提起  
—移動・展開する仏教説話—

のらせ得なかつたその「思ひの積にや、奈良の法華寺に有けるが、幾程もなくて、遂にはかなく成にけり。」という内容のもの。(語り本系)

⑥その後、桂川に入水したという内容のもの。(四部合戦状本・長門本・盛衰記)

⑦その後、横笛も亦出家し東山清岸寺において行ないますが、さらに閑静な所を求めて「何れの山の辺にもとあくかれ行ける」途中、桂川のほとりに至つて、遂に身を投げるという内容のもの。(延慶本)

⑧「又異説には、横笛は法輪より帰て髪をおろし、雙林寺に有けるに……其後横笛尼、天野に行て入道が袈裟衣をすすぐともいへり。異説まちまち也。」(盛衰記・巻四十)

さて、以上の如く、嵯峨の地を発端とするこの滝口・横笛にまつわる説話は、滝口の足跡において嵯峨から高野へと展開して行くというあり方を基本型としてもちながら、一方、横笛の話において、東山(清岸寺・雙林寺)・奈良(法華寺)・天野等の諸地域に移動するのである(桂川に關しては嵯峨に含めて考えができる)。

ある人物にまつわる話が、上記の如き諸地域を動きまわるという現象は、『平家』にあっては、有王と俊寛の娘の話の場合にも認められる。

①「(鬼界島より戻った有王によつて父俊寛の最後を知つたその娘は)やがて十二の歳尼になり、奈良の法華寺に行澄して父母の後世を弔ひ給ふぞ哀なる。有王は俊寛僧都の遺骨を頸にかけ、高野へ登り、奥の院に納めつつ蓮華谷にて法師になり、諸国七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。」(覚一本・巻三・「僧都死去」)

語り本系は、すべてこのような内容になつてゐる。ところが、これに対して、

②俊寛の娘は雙林寺に、有王は嵯峨に籠る(四部合戦状本)。  
③俊寛の娘は天野に、有王は高野に籠る(延慶本・長門本・盛衰記)。

という移動が、増補系諸本の間において認められる。して見れば、俊寛の娘と有王にまつわる話もまた、あきらかに、滝口と横笛の話と同様、嵯峨・高野・東山(雙林寺)・奈良(法華寺)・天野の諸地域に移動・展開して行くのである。ここで、当然、上記の諸地域が、何らかの糸でつながれているのだ、ということに思い至らねばならないであろう。滝口と横笛、有王と俊寛の娘、これらの話が、何故に上記の如き諸地域を動きまわらねばならないのか、そのことの背後にある原動力の実態をさぐろうという事が小論の目的である。

まず、この二つの話がもつ共通項について整理しておかねばなるまい。

①ともに男と女の話である。もっとも、有王たちの話には、恋という要素が含まれてはいないけれども。

②男の話に関しては、ともに、嵯峨→高野というかたちで、移動・展開している。滝口の出家については、資料としてより信憑性の高い吉田経房の日記『吉記』に、

「滝口藤原時頼、法輪院に於て出家す。年十八師典侍乳母子也道心に依てなり云々。当時の滝口の遁世は、定めて其例無き歟。」（義和元・十二・廿）

と記録されている。これのみでは、のこと、高野入山のことはさだかではないのだが、すくなくとも、彼の出家隠遁の最初の地が、事実、嵯峨であったということだけは明確に知り得る。いずれにせよ、滝口の話は、話としては嵯峨を起点として高野山へと展開して行くのである。

有王の遁世地については、より古本と見なされる『四部合戦状本』には、嵯峨と語られている。しかして、他の『平家』諸本が、一様にその遁世の地を高野と語っているとすれば、古くは、嵯峨にまつわる話として語られていた有王世遁譚が、後には高野にまつわる話としてすりかえられ

て行つたと考えることができよう。即ち、有王遁世譚もまた、嵯峨→高野というかたちで移動して行くのである。

②女の話については、ともに、諸本の間で、その遁世の地が、東山・奈良・天野と移動している。

③滝口・有王について、ともに、その女や主の骨を高野に運び納めたという話が伝えられている。

この二つの話の間に認められる上記の如き共通性は、この話が、もともとは民衆的な布教者たち、すなわち聖たち（それも、おそらくは高野聖たち）によって各地に運ばれ語られていたものであろうということを、そしてさらに、は、彼ら聖たちの体質やら行動自体が、かかる共通性を有する話を生み出して行くのであろうということを示しているように思われる。

## 二 話の運搬者

同じような内容の話が、その舞台だけをかえて、あるいは登場人物の名前だけをかえて別別に語り伝えられているという例は、説話の世界にあってはめずらしいことではない。

例えは、『閑居友』（下）には、「はつせの觀音に月まるりする女の事」という長谷觀音の利生譚が語られている。

ところが、全く同じ筋書の話が、『沙石集』(大系本・巻二)では、清水の観音のこととして述べられることになる。このことは、この説話を衆庶の間に伝承されて行く過程において、なれば自然的に、その舞台がすりかえられていつた、というようなことでは説明はつくまい。この話が、長谷と言い、清水と言い、古来あまりにも有名な観音の靈地と密着したかたちで流布するからには、その背後に、この話を、長谷寺の靈驗譚として語った長谷寺系の説経者の群が、清水の靈驗譚として語った清水系の説経者の群が考えられねばならないであろう。そしてその説経は、それらの寺の堂塔建立等のために、一紙半錢の喜捨を募るその勧進にさいして、観音の靈驗を宣揚する目的でおこなわれたものであつたであろう。勿論、この二つの寺院の間には、ともに觀音の靈地として、説経者達の交流が、何らかのかたちで、あつたに違いない。かくして、同一の話が、一方では長谷のこととして、一方では清水のこととして、世上に語られることになって行くのである。<sup>(5)</sup>

似たような事情は、上述の『平家』における滝口と横笛の話、有王と俊寛の娘の話も考えられよう。すなわち、高野系の聖たちが、各地を勧進遊行する途次、滝口や有王にまつわる話を、その土地、その地域に密着するようなかた

ちで語つた、その結果として、これらの話は、前節で指したような諸地域に移動・展開して行く、さらには『盛衰記』が述べる如く、「異説ましまち也」といったかたちで、より広汎な地域に発展して行くことになるのである。このことは、高野系の勧進聖の一人であつた西行の足跡をたどることによつて、より強力な裏付が与えられることになる。

『山家集』によれば、西行は一時、東山（おそらくは雙林寺辺であろう）や嵯峨野に止住している。この止住が彼の高野入山前のこととか後のことか、さだかではない。しかし、いざれにせよ、これらの地域に彼が足をとどめたのは、これらの地域に、高野山や東大寺の勧進聖となるような体質を有していた西行の心を引くに足るような特殊性があつたからに違ひなかろう。この一時の止住以外にも、彼はしばしばこれらの地を訪れていたようである。そして、東大寺再建の勧進聖として奥州にまで赴いたことのある西行は、勿論のこと、奈良をもしばしば訪れていたはずである。それがいつのことかあきらかではないが、『撰集抄』には、彼が南都に参り、処處巡礼の後、「俊惠の住み給ふ東大寺のふもとにたづねまかりて、なにとなく歌物語し」たという話が載せられている。

西行と天野との関係は、さらに重大である。『山家集』

るのである。

の詞書は、西行とかなり深い交渉があつたと考えられる侍賢門院中納言の局が「世を背きて小倉山の麓に住み」後、「小倉を住み捨てて、高野の麓あまのと申山に住」んだことを伝えている。また、この女性とは別人と考えられるが、『撰集抄』(巻四・巻九)には、彼の妻が天野に住んだ事が語られており、『発心集』(巻六)には、「(西行)むすめ尼に成りて、高野のふもとに天野と云ふところにさいだちて母が尼になりて居たる所に行きて、同じ心に行ひてなむありける。」という話が残されている。この天野に籠つた西行の妻や子が、西行と没交渉であつたとは考えられない。元来、天野の別所は、心なき身であるはずの高野聖に恩愛のいとなみを持つことが黙認されていたところで、もあつたらしく、『発心集』や『撰集抄』は、そうしたことを思わせるような話をいくつか載せている。『盛衰記』が語つた、「其後横笛尼、天野に行て入道が袈裟衣すすべともいへり。」という滝口と横笛についての異説は、あきらかに、この二人の妹背の生活を匂わしており、他の『平家』諸本に語られている道心堅固な滝口からは想像もできないような姿なのだが、天野という地域のもつ上述の如き特殊性の中からは、かかる話がきわめて自然に発生して來

### 三 骨と高野聖と説経

「有王は俊寛僧都の遺骨を頸にかけ、高野へ登り、奥の

さて、かくの如く、滝口と横笛の話、有王と俊寛の娘の話が、移動・展開して行く、嵯峨・高野・東山・奈良・天野の地域には、あきらかに、西行の足跡もまた印されている。勿論、西行の遊行は、それよりもはるかに広汎な地域に及んでいる。しかし、『平家』のこの二つの話が移動し展開して行く土地に、西行もまた訪れていたというこの事実は、決して単なる偶然の一一致ではなさそうである。『平家』の中に高野聖として登場する滝口や有王にまつわる話が上記の諸地域に移動・展開して行くかたちで語られ、これまで高野聖の一人であつた西行の足跡が、それらの土地に及んでいるとすれば、もっと多くの聖たちが、それらの地域を結ぶルートを往来していたことが考えられよう。そして、それらの聖たちによって、滝口や有王の話は、基本的に高野につながつて行く筋書をたもちながら、細部においては、それらの土地土地に密着するようななかたちで語られることになる。即ち「異説まちまち也」という現象がここに発生するのである。

院に納めつつ蓮華谷にて法師になり……」（覚一本・卷三  
・「僧都死去」）

「（淹口は水入した横笛の）死骸を潜上、火葬して骨を  
ば拾ひ頸に懸、山々寺々修行して、此彼にぞ納ける。い  
かにも都近ければこそ懸る憂事をも見聞とて、高野山に  
登つゝ、奥の院に卒都婆を立て、女の骨を埋つつ、我身  
は宝幢院の梨坊にぞ住しける。」（盛衰記・卷三十九・時頼  
横笛事）。

前節で述べた如く、淹口や有王にまつわる話は、一つの  
結末として高野の地を志向しながら、高野聖の足跡のまま  
に移動・展開する。それでは、高野聖は、何故に、高野山  
と前述の如き地域の間を往来するのであろうか。まず、嵯  
峨→高野・東山→高野というルートにかぎって考えて  
みよう。

上に引用した本文によれば、有王も淹口も、ともに、主  
の、あるいは女の骨を高野山に運んでいる。この一致もま  
た、決して偶然のものではない。高野山が、古来、祖靈のあ  
つまる納骨の靈地であり、高野聖が——ことに蓮華谷聖が  
諸国の無縁の靈骨を拾い集め高野へ運び供養する鎮魂呪術  
者であったことは、あまねく知られている。勿論、そのさ  
い、彼ら高野聖は、そうした供養されることのない死者の  
亡魂のおそろしさを説き、衆庶にその供養への結縁を求  
め、その結縁のための喜捨を勧進したことと思われる。謡  
曲の修羅物が、一様に閻諍の生活の中に落命した亡者の鎮  
魂をうながす、という形式で定着したことの背後にも、こ  
うした鎮魂呪術者達の活躍を想定せねばならないである  
う。『平家』の「僧都死去」の章段の「か様に人の思歎の  
積ぬる平家の末こそ怖しけれ。」という言葉は、その昔に  
あつては、決して空疎な観念的表現などではなかつたはず  
である。恨みを抱きつつ鬼界島に餓死した俊寛の亡魂の怖  
しさは、事実、そのようにして、有王と自ら名のるような  
高野聖によって衆庶に説き聞かされ、その鎮魂の供養への  
結縁が呼びかけられたに違いない。<sup>(4)</sup>

しかも、この結縁を勧進するということが、勧進の聖た  
ちにあつては、募財ということと表裏一体をなしていたと  
いう点に注意せねばならぬ。そのことは、『とほずがたり』  
(卷四) に「（磯長の太子廟に詣でた）おりふし、如法經を行  
ふも、結縁うれしくて、小袖を一つまゐらせて帰りぬ。」  
とあることからも確認せられよう。「如法經を行ふ」とは、  
言うまでもなく、如法經書写供養のことであり、勧進の聖  
たちによって衆庶の間にそれへの結縁が呼びかけられた鎮  
魂のための儀礼であつた。『とほずがたり』の作者が結縁

した如法經書写供養が、いかなる寺院に属する聖によつて勧進されていたかは、さだかではないが、それへの結縁のためには「小袖を一つまるらせ（る）」といった金品の喜捨が必要であったのである。高野系の勧進聖も亦かくの如くにして、拾い集めた骨の鎮魂供養への結縁を人々に求め、その骨と喜捨せられた財物とを高野に運んだのであった。

してみれば、有王や滝口が、主の、あるいは、女の骨を高野に納めたというのは、まさに高野聖そのものの姿を示したものであつたと言えよう。そしてさらに、『盛衰記』において、滝口が、女の骨を頸にかけ「山々寺々に修行して、（その骨を）此彼にぞ納めたと語られているのは、これを高野聖のおこないとして見るとき、きわめて示唆的である。おそらく、自ら滝口入道と名のるような者が、ここかしこにおいて、へこそこそかの横笛の終焉の地」といつたような内容の説経をしつづ骨を埋葬し、その供養への結縁をうながすということが、高野聖の間において、事実、おこなわれていたのであろう。その時、勧進の聖たちは、自らの募財活動を促進せしめんがために、自らの説経をその土地あるいはその目的にふさわしいような内容に変更しつつ人々に語りかけ、結縁をうながしていたものと思

われる。かかることがなければ、『平家』の諸本の間ににおいて、横笛終焉の地が転々とすることの説明はつかないのである。

(勧進の聖たちが、その募財という目的を背後にもつて説経をおこなう場合に、どれほど強引な、そしてまた、たくみな話術を展開して人心をつかむかは次の例によつてもあきらかであろう。——建保五年（一二一七）嵯峨の清涼寺が炎上した。この時、「貴賤を勧進して造営の功をとげ」たのは、梅尾の明惠上人であつた。この「釈迦堂興隆勧進のために、五十ヶ日あひだ東西の名僧がはるばる毎日説法」したという。その中で静遍僧都の説経は出色のできばえであつたらしい。「彼の僧都の説法にいはく、それ釈尊は……此娑婆世界の衆生をば、悉わが子なりとのたまへり。世間の父母はただいま今世一生の身をなすく。釈迦大師は、多生利益の恩、出離解脱の道ををしへ給眞實の父母なり。その恩世間の父母には、百千倍してたとへぬべきやうなし。世間の父母の家の焼たらんには、その子としては一人しても造るべし。いはんや眞實の父母の焼ぬるをば、心あらん人は一力にても立獻べし。まして分分にしたがふ財宝をなげて、などか助成し給はざるべき」と説くと、諸人は、彼のこの論理に信伏した。そこで彼はさらに追いうちをかける。「僧都も涙ををさせて申されけるは、この事さすがに道理なれば面面奉加のこころざしはましますらん。されども凡夫の習心のつななさは、家家に帰給なば明日まあらせん明後日奉加せんなど思て、心ざしもありともさしあたりたる世間のいとまなきにうち忘て、おほくはむなしかるべし。奉加せんと思はん人は、やがて此座にて獻たまふべし。」これをきくや、一座の聴聞衆

は、「衣をぬぎ、小袖をぬぎ、直垂、大口、太刀、刀等にいたるまで」奉加したという(『清涼寺縁起』)。—— 积尊という眞実の親の家を再建しないといふことがあるか、といふ人心の弱点につけこんだ論理、明日になつたら忘れてしまう、今この場で寄付をして行けという強引さを強引さと感じさせないようなたたみかけた要求、そして自らの言葉に涙を流してみせる演技力、こうした人心収攬の術は、静遍というすぐれた出家者において、はじめて可能なことであつたかも知れない。だが、勧進の聖たちは、その募財という目的のために、多かれ少なかれ、このような人心を収攬する詰術を会得していくなければならない、なかつたであろう。本来は出世間をめざすものでなければならぬ説経も、募財という現実に直面しては、そこで権謀術数のかぎりをつくさねばならなかつたのである。かくして、勧進聖の説経は、そのシチュエーションやらその目的やらに対応してそとのたびに様様な修正や変更がなされたことと思われる。

ところで、この嵯峨清涼寺再建の勧進の説経をした静遍は、人にも知る如く、高野山蓮華谷聖の祖明遍の弟子であり、後には静遍自身も亦、高野山に入山している。とすれば、嵯峨——高野というルートは、この静遍の動静の中にも確認することができるのである。しかも、高野納骨を一般化したのは、この静遍の師明遍を祖とする蓮華谷系の聖であつたらし<sup>(6)</sup>。『平家』では有王も滝口も、この蓮華谷系の聖として語られているのである。

さて、高野聖における收骨・納骨というおこないを考えるとき、高野と嵯峨とが、あるいは、高野と東山とが結びつかねばならぬ必然性が、そこにうかびあがつて来る。

「あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つるならひならば、いかにものあはれもなからん」という『徒然草』の言葉によつてもあきらかな如く、往古、嵯峨野や東山は、言わば「死者の国」なのであった。その周辺には、鎮魂されねばならぬ見捨られた白骨が、無数に散乱していたことと思われる。この地域が、こうした特殊性をもつものであるならば、そこには、当然、それら無縁の亡魂を鎮める呪術師としての聖たちの存在が考えられねばならないであろう。五来重博士は、『平家』に語られた滝口入道の動静そのものが、高野聖と嵯峨の聖との間に交流のあつたことをものがたるものであると説いておられるが、たしかに、『盛衰記』などにおいて語られている、桂川に入水死した横笛の骨を滝口が高野にまで運んだという筋書は、その背後に、嵯峨の見捨られた白骨が、聖たちによって高野に納められていたという事実のあつたことを思わせる。かの重盛の骨は、平家都落のさい、肥後守貞能によつてほりおこされ、(その墓は法性寺にあつたと考えられている)、高野に送られた、と言われており(覚一本・卷七・「一門都落」)、さらには、南都焼打の責任者として斬首された平重衡の死骸は、これまた高名な高野聖の一人である俊乗房重源を介して日野にはこぼれ、そし

てその骨は高野へ送られたという（覚一本・卷十一・「重衡被斬」）。こうした伝承が発生することの背後にもまた、都の骨を高野へ運んだ聖たちの姿を想定することができよう。高野系の聖が、東山や嵯峨の地を訪れるという、そのことは、彼らの骨拾いという職能と決して無関係ではあり得なかつたはずである。

しかも、嵯峨や東山は、その地域 자체、勧進や鎮魂儀礼のさかんにおこなわれていたところでもあった。例えば、『平家』において、建礼門院の出家の戒師と伝えられる東山長楽寺の阿証房印西は、多数の人々に縁縁を求めて平家亡魂の菩提を弔うような、融通念佛勧進の聖であつた。重盛の燈籠堂の説話も、そのような東山系の融通念佛勧進の聖の間から発生したものであろう。嵯峨の地に勧進の聖が往来したであろうことは、先の静遍の清涼寺勧進の話からもあきらかである。この清涼寺の勧進には、源空の弟子念仏房も参加していたらしいが、滝口が住んだという往生院もまた念仏房の勧進により草創されたものであつた。有名な嵯峨の大念仏は、勿論、鎮魂の儀礼であつたはずである。こうした東山系・嵯峨系の聖と高野聖との間に交流のあつたらしいことは、西行の『山家集』における、「長楽寺にて、夜紅葉を思ふと云事を人々よみけるに」と

いった詞書や、

嵯峨に罷りたりけるに雪ふりかかりけるを見おきて出でしことなど申遣はすとて

おぼつかな春の日数の経るまゝに

嵯峨野の雪は消えやしぬらん

静忍法師

立返り君や訪ひくと待ほどに

まだ消えやらず野辺の淡雪

などの贈答によつてもあきらかであろう。

かくして、高野の聖たちは、嵯峨や東山を訪れ、骨を拾い、その念佛者と交流し、そして、骨とともに、その地の話をもまた、高野へ運んだのである。

#### 四 女人の話について

横笛・俊寛の娘、この二人の女人の話にのみ限つて言えば、その遁世の地は、『平家』諸本において、東山・奈良（法華寺）・天野という三つの地域の間に移動・展開している。これらの諸地域には、元来、そのような、女人につわる信仰譚が発生しやすいような素地をもつていたらしい。女人と天野と高野聖、この三者のかかわり合いについてはすでに述べた。東山の地についてもまた、『平家』に

おいて建礼門院出家の戒師を、東山長樂寺の阿証房印西として語っている点、あるいは、この印西に建礼門院右京太夫が結縁している点<sup>(1)</sup>、『盛衰記』に見える髑髏尼の説話が、この印西の長樂寺を舞台として語られている点<sup>(2)</sup>等からして、女性発心者とかかわりの深い土地であったことが知られる。しかも、すでに述べた如く、この東山の地には、高野聖が、つねに訪れていたようである。天野にしても、前述の如く、ここが高野聖にとって、恩愛のいとなみを持つことを黙認された特別の地域だとすれば、さらに足繁く高野聖の訪れがあつたであろうことは想像に難くない。したがって、東山や天野を舞台として、高野聖にまつわる女人の話が語られる要因は、この二つの地域そのものが、すでに持ち合せていたと言わねばならぬ。

奈良の法華寺に関しては、そこが總国分尼寺であったといふ事実からすれば、この寺に女性にまつわる話が伝えられるのは、当然のことであつたろう。『とはざがたり』の作者も、この寺を訪れたさい、「冬忠の大臣のむすめ」という名門の女性が、「寂円房と申して一の室に」住んでいるのに会い、無常の理などを物語っている(卷四)。大炊御門冬忠の娘が尼となつて住んでいるというこのことからもうかがい知れるように、当時、この寺には、俗世に様様な

思い出を残しながら尼となつた女性が数多くいたにちがいない。そうした環境の中では、例えば俊寛の娘とか横笛といつたような、劇的な人生を体験をした女性の話は、枚挙にいとまのないほど語り伝えられていたはずである。

だが、ここで問題とせねばならないのは、この寺と高野聖との結びつきであろう。何故に、高野聖の話が、この寺と結びつくのか。勿論、法華寺が尼寺として有名であり、女性出家者がこの寺に入るはきわめて一般的なものであったが故に、高野聖たちは自らの話の中にこの寺をとり入れたという単純な説明も可能であろう。その内容が世間にもつともよく知られていたであろう語り本系の諸本において、俊寛の娘や横笛の話が、いずれも、女は法華寺に籠つたというかたちで定着しているのは、女性の出家のしかたとして、これが一つの典型であつたからなのかも知れない。しかし、このことに加えて、奈良という地域自体が高野聖と深いかかわりを持っていたということを考えさせねばなるまい。周知の如く、東大寺再建の大勧進は、俊乗房重源であった。無論、彼自身、高野聖の中の指導者格であったわけだが、五來重博士の御指摘によれば、彼は、東大寺勧進の間に、自らの配下の聖の中で特に道心ある者をえらびだして高野の新別所におくりこんだという。こうした

すぐれた道心者の中にも、重源の指揮下にあって、東大寺再建の事業に関与した高野系の聖たちは多数いたことであろう。かくして、東大寺勧進は、奈良の話が高野と結びつく一つのきっかけとなり得たはずである。南都焼打の責任者として奈良で斬られた平重衡の骨が重源の仲介によって高野へ送られたという話も（観一本・卷十一「重衡被斬」）、あきらかに、東大寺勧進がきっかけとなって奈良と高野とが結びついたものとして考えることができる。

かくして、高野聖にまつわる女人の話もまた、高野聖の足跡のままに、奈良の法華寺や東山や天野に移動展開していくのである。

## 五 恩愛と高野聖

ところで、滝口入道の話にその一つの典型が見られるのだが、高野聖の話には恩愛にまつわるもののがきわめて多い。それも、断ちがたき恩愛を、非人間的とも言えるような非情さで断ち切るといった筋書きを、一つの基本めいたものとしてもつていると考えができる。有名な『かるかや』の物語や御伽草子の『三人法師』の第三話などは、高野聖たる父が父の顔を知らずに成長したわが子に対面した時、かたくなに父としての名のりをしなかったという点

において、全く同一の内容を有しているが、滝口と横笛の悲恋の物語も、恩愛とかかわることを拒絶するという滝口の姿において、それらの話と決して異質なものではない。勿論、これらの話は、話として作られたものであろう。だが、そうした類似した話が発生して来る素地は、高野聖自身の体質の中に認めなければならないようである。例えば『発心集』（巻一）には次のような話が語られている。高野の「南筑紫上人」は、もと筑紫の有力な武士であった。だが、ある日、突如外出先でこの世の無常を悟った彼はそのまま家にも戻らず出家の志を抱いて京をめざす。これを知った十二三になる娘が、「泣く／＼おひ付きて『我をしてては、いづくへおはします』とて、袖をひかへたりければ、『いやや、おのれに、さまたげられまじきぞ。』とて、刀をぬき、かみを押切りつ。むすめ恐れおののきて、袖をばはなして返りにけり。」その後、彼は高野に上り、行ないました。彼の娘もまた「尼になりて、かの山（高野）のふもとに住みて、死ぬるまで物打ち洗ぎたちぬふわざして」父の入道につくしたという。あるいはまた、同じく『発心集』の巻七には、尾張の豪族の嫡子であった者が、発心出家して重源の下で大仏勧進に従事し、後、高野に上つて行ないすまし、彼を慕つて訪れた親妻子と天野で対面

して切に帰宅をすすめられた時も、遂にそれに応じなかつたという話が載せられている。断ちがたき恩愛を断つたと、いう点でこの二人の聖の話は共通する。だが、出家以前の段階で、この二人は、ともに豪家の主として深く世俗にかかり、肉親との恩愛の生活をもつていたといふ点でも共通している。かくしてすでにもつてゐた恩愛の生活を断ちきらねばならぬが故に、彼らの出家は必然的に悲劇的色彩を帯びることになる。高野聖の多くは、こうした人生なればにして突如出家隠遁を思い立つたような人物によつて占められていたようである。御伽草子『三人法師』の話は、三人の高野聖が一所に寄り合い、「われらみな半出家なり。何故に遁世しけるぞ。いざ座禅の面々懺悔物語申し候はん」と、それぞれの発心の由来を語る形式になつてゐるが、この「半出家」とは、「中年すぎてから出家した人」のことであるらしい。そしてこのような者は、「幼年期の交衆から複雑な学道階梯ときびしい修業をへて、はじめて一人前になれる学侶や行人の仲間にはいることは不可能であつたから」高野山における第三の階級たる聖の群に投じなければならなかつた。

だが、彼らは、そのようにして、恩愛をふり捨てて出家をするものの、後日、ふたたび、かつて捨てたはずの恩愛と

の——たとえ、それがどれほど精神的に昇華したものであらうとも——交流・出会いをもつことになる。ここに高野聖の話の今一つの特徴を見出すことができるであろう。滝口入道は、かつて会うことを拒絶した横笛と、後日、歌の贈答をしている。あるいは、女の骨を頸にかけて高野に登っている。そして異説によれば天野で横笛と妹背の生活をすることになる。その内容はさまざまであつても、滝口入道は、出家後、このようにして女と交流を持つことになるのである。かるかや道心や、『三人法師』の篠崎入道は、血の涙を流す思いで父としての名のりだけはしなかつたが、父の顔を知つてはおらぬ我子との苦しい対面を経験している。勿論、この場合、名のらぬという行為は、恩愛を断つという意味をもつていていたであろう。しかし、その名のらぬという行為を苦しみもだえつせねばならなかつたという点において、彼らはこの時逆に恩愛と深くかかわつていたのである。西行や南筑紫はかつての妻あるいは娘と天野において交渉を持つてゐる。この交渉は、『発心集』や『撰集抄』によれば、より世俗的なかたちのものであつたらしい。半出家の者は、その世俗的生活がながかつただけに、捨てても捨てきれぬ様様な係累が、出家後の彼らの身辺に執拗につきまとつてゐたのであろう。

高野聖にまつわる話の多くに見ることのできる、断ちがたい恩愛を断つて出家する、そして後日、かつて捨てたはずの恩愛との再度の交流・出会いを持つというこの基本的な筋書きは、ながい世俗の生活を体験して来た半出家の者と、いう高野聖の体质そのものの中から生れたものではなかつたであろうか。

## 六 結

さて、滝口入道の話は、高野から、維盛入水の話とか、わりつつ、さらに熊野へと展開する。勿論、この展開の背後にも、高野と熊野とを結びつけた聖たちの姿を考えることができよう。例えば、文覚（彼もまた、言はば半出家の者であった）にその典型を見ることができるような、苦行的な聖は、熊野と高野の間を絶えず往来していたであろうし、しかも、熊野自体、〈死者の国〉であった。

有王は蓮華谷の聖となつた後、さらに俊寛の菩提を弔うために、諸国七道を修行してめぐりあつたといふ。して見れば、俊寛や有王の話もまた、各地に移動・展開して行くであろう。事実、この二人の遺跡と称するものは全国に散在する。<sup>⑩</sup>

だが、このようにして、さらに遠くへと遠心性をもつて

展開して行く説話が、一方では、どうして『平家』の中に求心的に収録されることになるのであるか。高野聖の話ばかりではない。『平家』に見られる慈心坊の説話や文覚の発心譚はあきらかに勧進聖の話である。祇王や小督の説話も、もともとは女性シャーマンによつて語られていた話であろう。こうした話が、『平家』の中にとり入れられることの背後には、一体、何があつたのであるか。

ここで、一つの仮説を考えてみよう。『平家』の原作者ではないかといわれている伝説的な人物、信濃前司行長は、『徒然草』（二三六段）によれば、宫廷での失敗を「心うき」として学問をすべて遁世し、慈円の扶持を受けることになつたのだといふ（とすれば行長もまた半出家であつた）。当時、この慈円のもとには、行長のほかにも「一芸ある者」が多数身をよせていたらしい。そして、行長の書いた『平家』を、これまた慈円の扶持を受けていた生仏なる盲僧が語つたのだと言われている。では、何故に、慈円はかかる者どもをその傘下に養つていたのか。このことについて、慈円が勧進聖を陰であやつる人物ではなかつたという仮説をもちだすことができる。事実、慈円は、保元以来の戦死者の亡魂のために大懺法院等の道場を興し、大がかりな鎮魂のための法会を幾度かにわたつていとなんてい

る。かかる事業を遂行するためには、広く衆庶に勧進し、結縁を求めることがなければならぬ。こうした勧進にさいして、「一芸ある者」は、きわめて有能な勧進聖となるであろう。

そして、もし、この仮説が成り立つならば、この勧進の組織を通して、各地の話が慈円の周辺に集められるというルートを想定することができる。あるいは、行長が書いたた  
く『平家』自体がこの慈円の勧進への結縁を促進せしめるための鎮魂曲として語っていたのであつたかも知れない。

洪

- ① 拙稿「平家物語と融通念仏」(仏教文学研究第十一集)  
 ② 長谷寺系の勸進聖のことについては永井義憲博士の御研究  
 「勸進聖と説話集」(日本仏教文学研究所収)にくわしい。  
 ③ 日本古典文学大系本「御伽草子」頭注による。  
 ④ の論文参照。